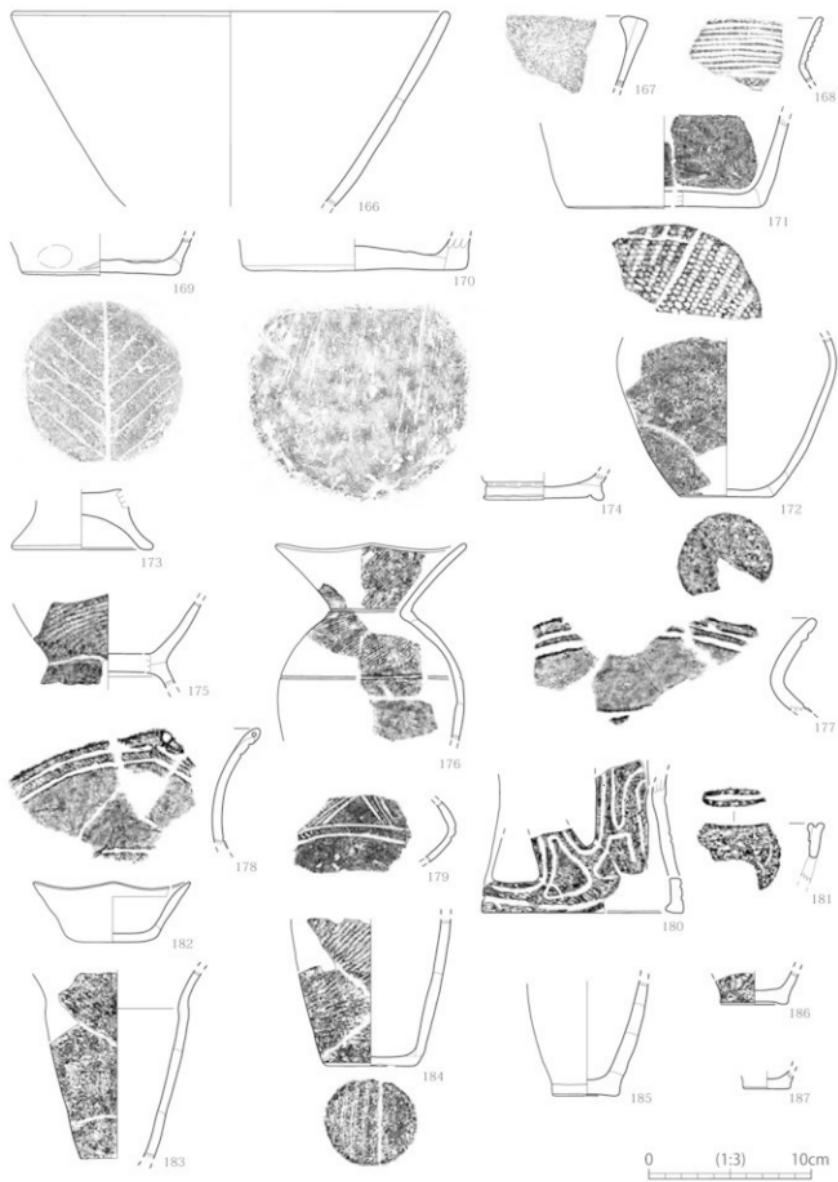
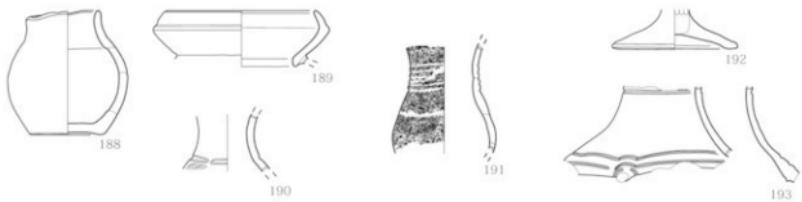


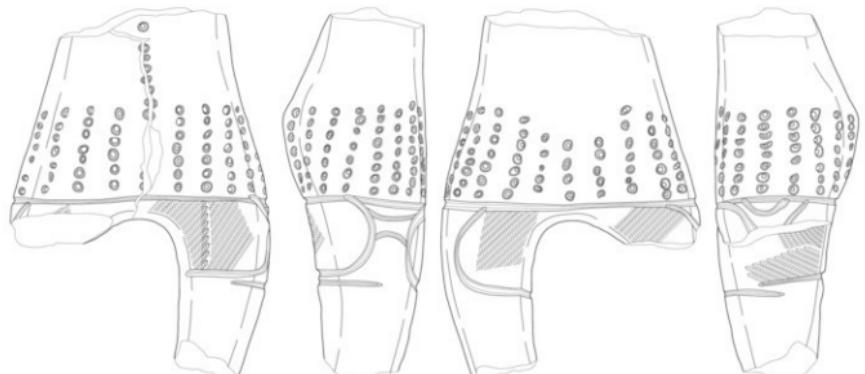
第38図 捨て場 出土土器③



第39図 捨て場 出土土器④



0 (1:3) 10cm



0 (2:3) 5cm

第40図 捨て場 出土土器⑤・土製品

の竹簡文を施し、その下位に沈線による文様が描かれる。沈線区画内には縄文（L R）を施す。焼成はやや不良であり、表面中央に焼成時の割れが見られる。

210～227は、石鏃である。捨て場から出土した22点中18点について実測し掲載した。210～219は基部が凹む凹基式のものである。210は硬質頁岩製で二等辺三角形を呈し、抉りが深く脚部先端が尖っている。211は石英製で逆U字状の抉りが施され、最大幅が基部中央の独特な形状である。212・213は硬質頁岩製で抉りが浅いものである。214は正三角形を呈するもので石英製である。215・216は身幅が狭く細長いもので、215は硬質頁岩、216は石英製で右下半が欠損している。217～219は幅広のもので未製品のものである。217・218は瑪瑙製、219は鉄石英製であり、218は先端及び脚部端を丸く仕上げている。220は瑪瑙製で、抉りの無い三角形を呈した平基式である。221は瑪瑙製で、丸みのある側縁部中央がわずかに凹む円基式である。222～227は基部に張り出しを持つ凸基式のものである。222・223・225は珪質頁岩製、224は硬質頁岩製、226はチャート製、227は鉄石英製である。222は側縁部に細かい剥離を施し丁寧に仕上げている。226は細身であり、227は張り出しが小さい。

228～231は楔形石器である。228は硬質頁岩製で亀甲状を呈し周縁に粗い剥離を施す。229は鉄石英製、230は珪質頁岩製で、上下端部に剥離を施す。231は下端機能部に使用痕が残る。

捨て場出土の削器4点中2点について図化した。232・233は削器であり、232は石英製で側縁から下縁にかけて微細な剥離を施す。233は一部表皮の残る不定型な硬質頁岩製である。

234・235は石錐である。234は玉髓製でつまみ部と錐部が明瞭なもので、先端が欠損している。235は硬質頁岩製の鋭利な先端部を利用したもので錐部作出の二次加工は見られない。

236は、硬質頁岩の剥片末端を剥離により刃部とした搔器である。

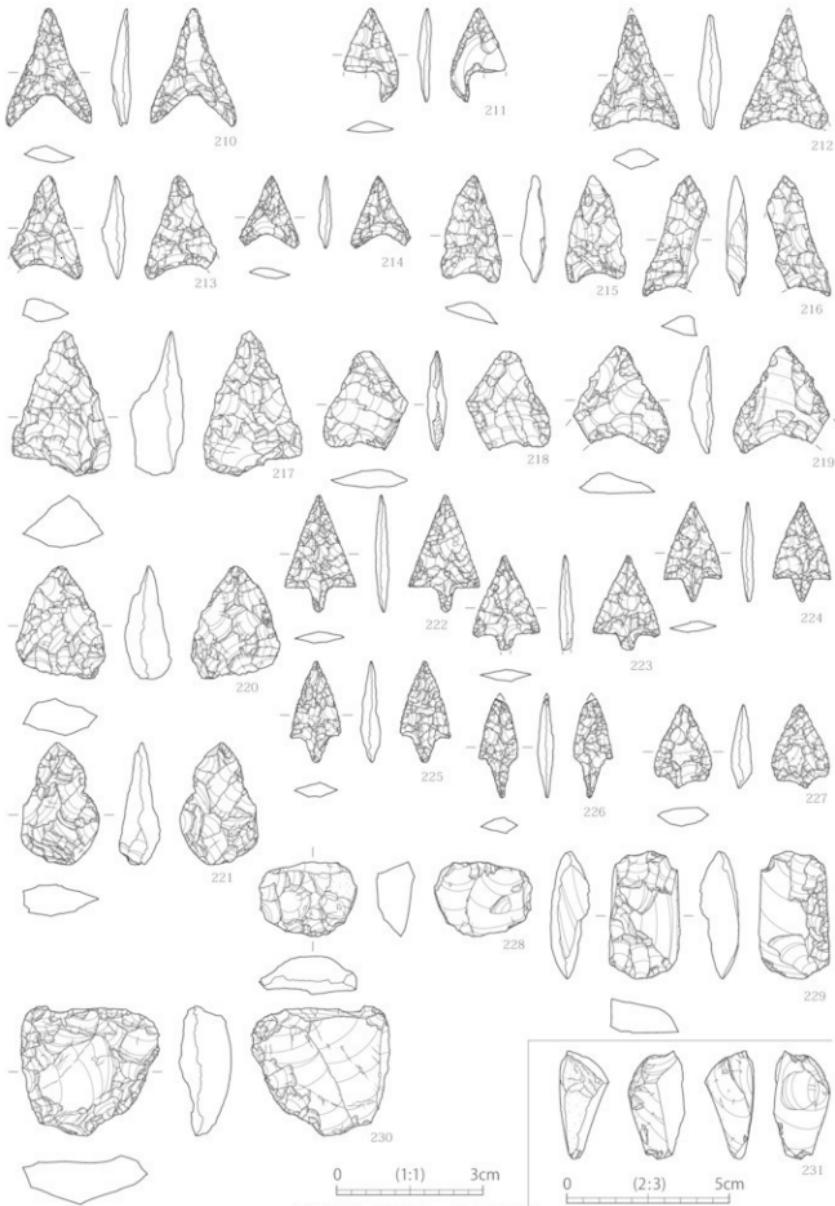
二次加工剥片は7点中5点について図化した。237～241は二次加工剥片であり、237は粗い剥離の玉髓剥片を用いて、側縁部に細かい剥離を施し刃部を作り出している。238～241は長さ10～15cm程度の大型の剥片を用いたものである。238は表皮の残る頁岩の先端部に剥離を施している。239～241は粘板岩製で、239・240は表裏両面に摺理面が残る板状剥片を用いる。241は鋭利な先端側縁部に細かい剥離を施し、刃部を形成している。

242～245は微細剥離剥片である。242は頁岩製、243は珪質頁岩で縁辺部に不規則な剥離が施される。244・245は大型剥片を用いたもので、表面に摺理面が大きく残る。244は粘板岩製、245はホルンフェルス製のもので、縁辺部に両面剥離による細かい剥離が残る。

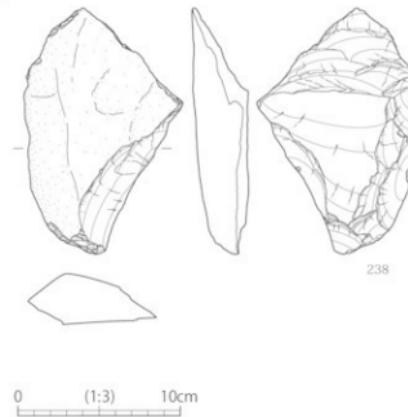
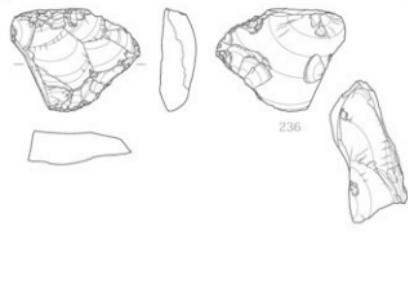
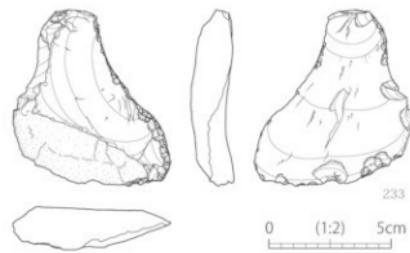
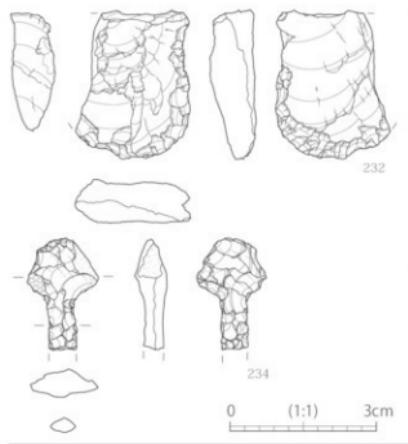
剥片は小破片も含めて252点出土し、その中から3点について図化した。246～248は表裏両面に明瞭な剥離面を持つ剥片であり、246は玉髓製で表皮の残る剥片の打点部が同時割れしている。247は硬質頁岩製、248は玉髓製で右下半から欠損している。

打製石斧は破損品が多く出土し、破損後投げ捨てたと思われるため同一個体のものも多く含まれる。打製石斧は50点出土し、その中から残存状態の良好な3点について図化した。249は凝灰岩製で、断面楕円形を呈し厚みのあるものである。側面を細かい剥離で成形している。250は凝灰岩製の大型櫛を加工したものの、刃部が欠損しており基部と考えられる。251は粘板岩製の両面剥離により棒状に仕上げたもので、一部に摺理が見られる。

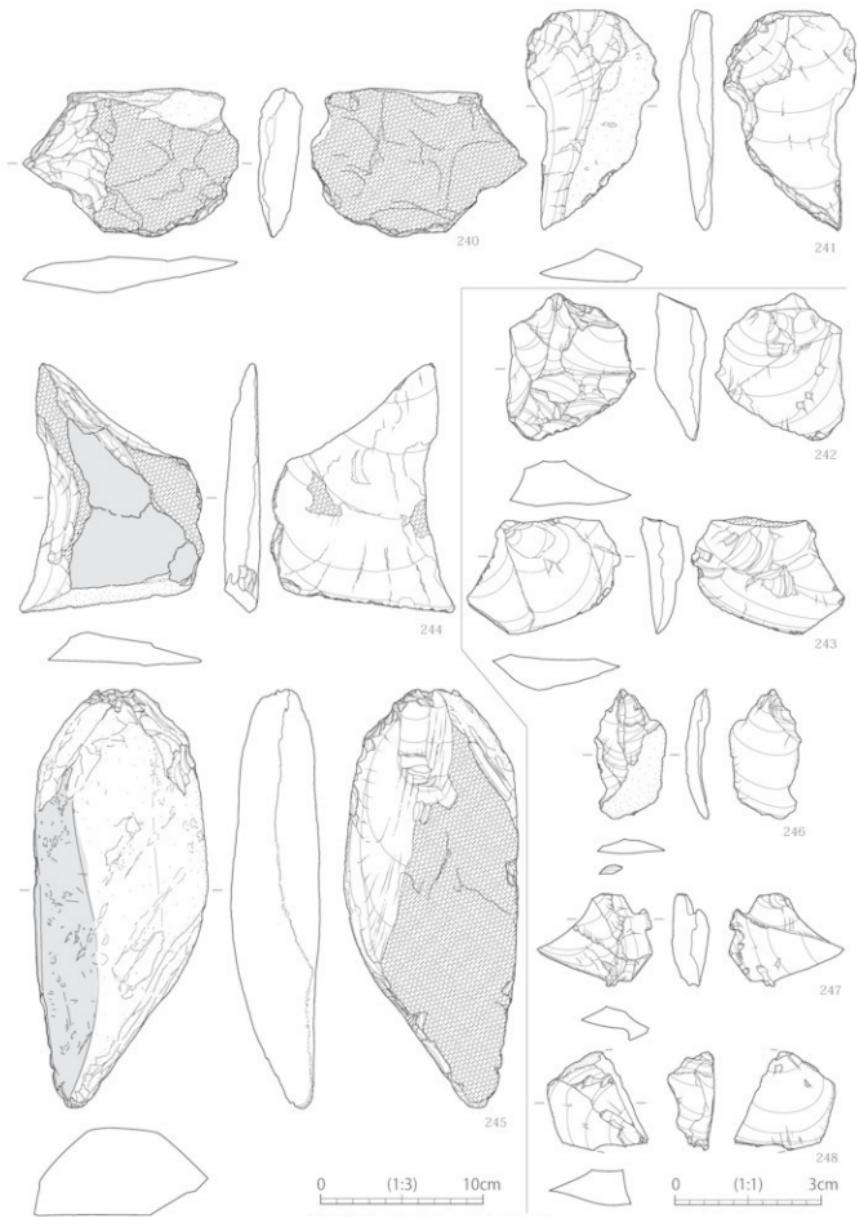
磨製石斧は、出土した16点中1点について図化した。252はやや小形の磨製石斧であり、表裏両面に擦痕が明瞭に残るもので砂岩製である。刃部および上半が欠損しており、欠損後被熱に



第41図 捨て場 出土石器①



第42図 捨て場 出土石器②



第43図 捨て場 出土石器③

よる変色や火ハネが見られる。上面欠損部の剥離面を再加工した痕跡が残る。

礫器は破損品が大量に出土し、同一個体のものも多く含まれるが、合計 211 点が出土した。その中から残存状況の良好な 2 点について図化した。253・254 は凝灰岩製の礫器である。253 は断面長方形を呈した礫の一縁片に粗い剥離を施したもので刃部角は鋭い。254 は下辺に粗い剥離が見られ、表面中央付近に敲打による浅い凹みが残る。

棒状石製品は、大小合わせて 109 点と多く出土した。この中から大形礫を使用したものを 4 点、小形礫を使用したものを 6 点、計 10 点について図化した。255～258 は、大形の棒状を呈した自然礫を加工し使用したものである。255・256 は凝灰岩製で、255 は下半が欠損し全体形状は不明であり、256 は剥離により敲打面を形成する。257・258 はホルンフェルス製であり、257 は一部損壊面が残る。258 は断面が三角形の三角柱状である。259～265 は、小形の棒状を呈した自然礫を加工し使用したものである。259 は砂岩製、260 は凝灰岩製であり直角に対応する二面に対して研磨による面取りを施す。261・262 は砂岩製で、261 は断面がレンズ状、262 は断面が楕円形を呈する。263・264 は凝灰岩製で、263 は断面が平行四辺形を呈するように表裏対称の側縁に研磨による面取りが施される。264 は片方の側縁と表裏両面が研磨により面取りされ、礫面の剥離による段差に対して研磨による平滑化を図る。

捨て場にて出土した磨石・敲石は最も個体数が多く、小破片も含めて合計で 587 点である。この中から残存状況の良好な 5 点について図化した。265 は花崗岩製の磨石、266・267 は砂岩製の磨石・敲石である。いずれも両面に磨面を持ち、266 は側面に小規模な敲打痕、267 は右側面から裏面にかけて敲打痕が明瞭に残る。268 は棒状を呈した砂岩製の敲石であり下面に敲打痕が残る。269 は凝灰岩製のもので、全面に磨面を持ち、下面・右側面に敲打痕が残る。

凹石は形状が異なるものが多く、捨て場全体で 43 点出土した。器種が礫器や磨石・敲石などでも、明瞭な敲打による凹みを持つものは凹石として取り扱った。出土した 43 点中 8 点について図化した。270～277 は砂岩製で、表裏面に段差のある凹みを複数個持つものである。270～273 は棒状を呈し、274～276 は断面長方形の平礫である。277 は断面三角形の三角柱を呈するもので、表、両側面全てに 2 個の大きな凹みを持つ。

石皿・台石は合計で 103 点出土したが、ほとんどが破片である。この中から石皿 7 点、台石 1 点の計 8 点について図化した。278 は小形の砂岩製のもので、上半が欠損している。279～281 は砂岩製の大形の礫を使用したもので、磨石使用による浅い凹みが上面に確認される。282～284 は大形の砂岩製の板石を使用した石皿である。282 は裏面に台石状の細かい凹みが見られる。283 は裏面に線状の凹みが、284 は裏面に多数の敲打痕が残る。285 は大形の安山岩を用いた台石である。

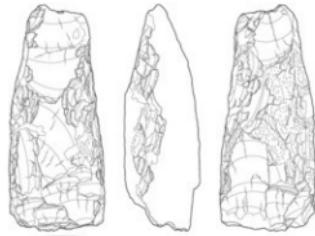
砥石は小破片が多く、全部で 35 点出土し、この中から 3 点について図化した。286 は薄手の砂岩製で、左半身が欠損している。287 は砂岩製の石皿の破損品を砥石に転用したもので、石皿使用時の縁が残る。288 は凝灰岩製のもので、全面が研面として使用されている。

289 は凝灰岩製の石錘である。円形を呈し上下に紐掛部の凹みがあり、側面を丸く仕上げる。

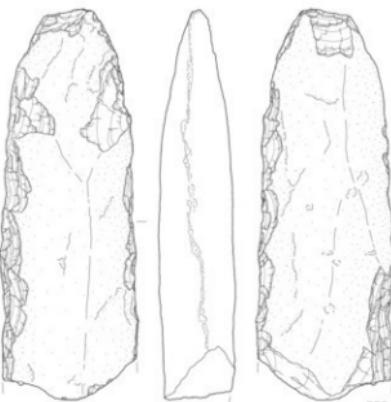
290 は砂岩製の石製品（垂飾品）である。表裏両面とも研磨して作りあげた平坦面の中央に紐通し用の穿孔を持ち、角を削り丸く仕上げている。

291 は粘板岩製で、全面に研磨を施した異形石器である。下半欠損のため全体形は不明である。

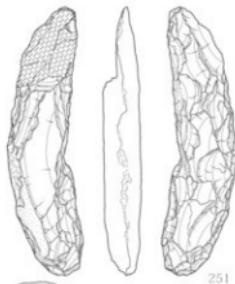
292 は砂岩製の不明石製品である。上端が凹み丁寧に仕上げているが使途は不明である。



249



250

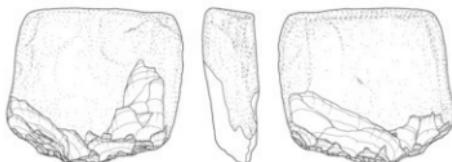


251

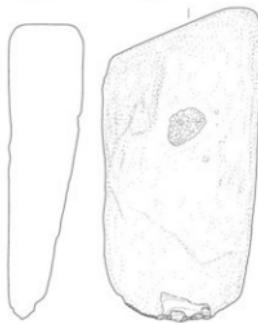


■ 火ハ水 ■ 植然

252



253

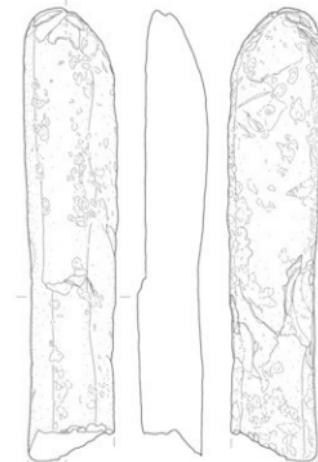


254



0 (1:3) 10cm

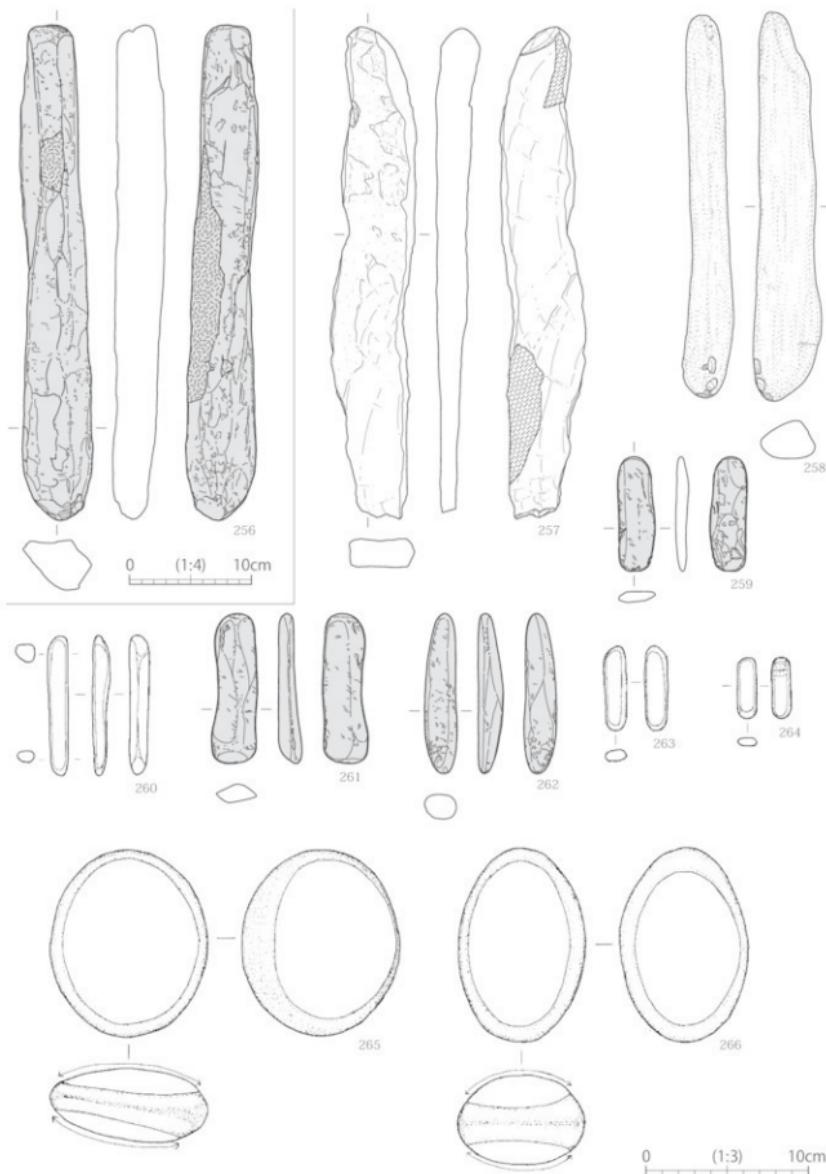
第44図 捨て場 出土石器④



255



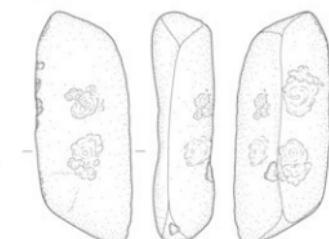
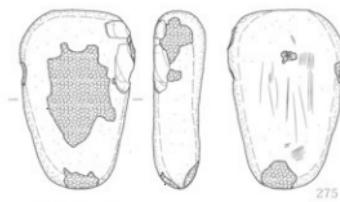
0 (1:4) 10cm



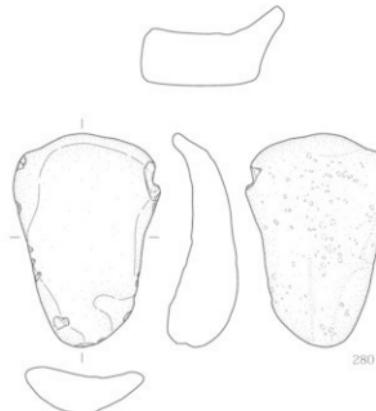
第45図 捨て場 出土石器⑤



第46図 捨て場 出土石器⑥

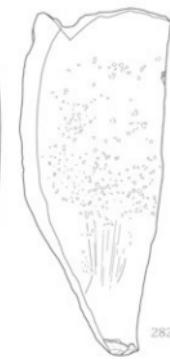
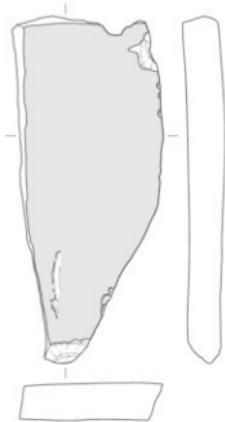


0 (1:3) 10cm

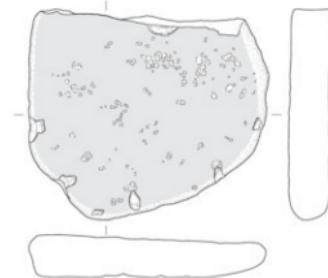
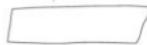


0 (1:4) 10cm

第47図 捨て場 出土石器⑦

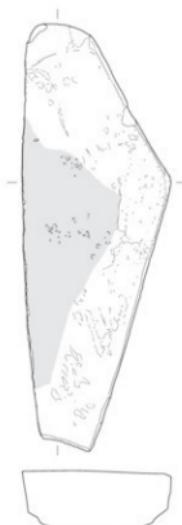


282



283

0 (1:4) 10cm



284



285

0 (1:5) 15cm

第48図 捨て場 出土石器⑧



第49図 捨て場 出土石器⑨

溝(第50図)

縄文時代の溝は、E-6区の南側、東側から西側へ向かって直線的に検出された。捨て場直下より検出され、捨て場よりも古い溝である。検出された規模は長さ約2.3m、幅約30cm、検出面からの深さ約10cmであり、埋土は炭化物をわずかに含む灰黄褐色土である。



第50図 縄文時代 溝

3 遺物(第51～57図)

縄文時代の遺物は、調査区全体から出土した。東側の上段から南西側へ下っていく地形のため、尾根部やB～E～7・8区の急斜面部での出土量は、緩斜面の続く中～下段に比べて少ない。また、平安時代の遺構内からも多数出土している。出土した縄文土器は、大部分が縄文時代後期前～中葉のほぼ同時期のものである。これらの出土状況から、上段の遺構内や意図的に廃棄場とされた捨て場以外の遺物は、生活拠点である尾根の丘陵部より斜面に沿って調査区全体に広がったものと想定される。石器については時期の特定が困難であり、縄文時代のものとして取り扱った。

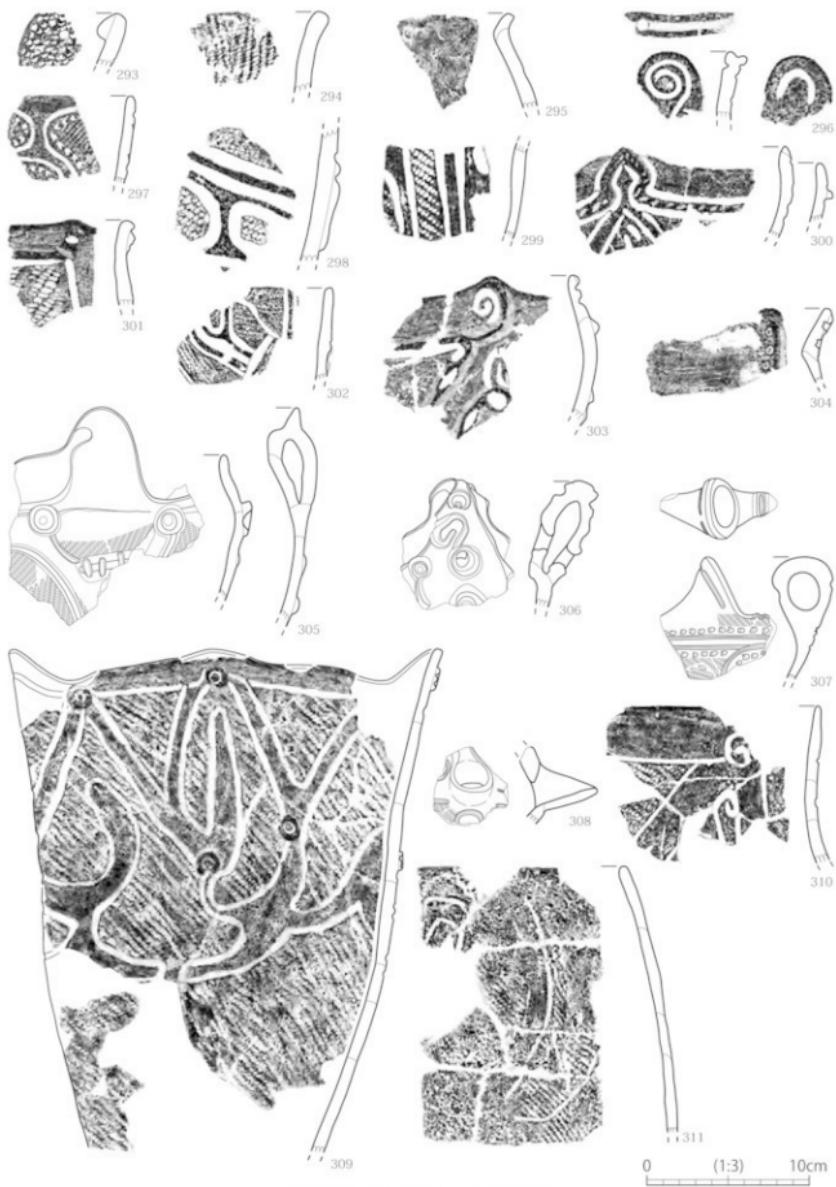
遺構内出土以外の縄文時代の遺物は、土器1,640点、石器1,099点の総数2,739点である。その中から、土器30点、石器57点の計87点について実測し掲載した。

293～295は胎土に纖維を含む縄文時代前期のもので、293は内面に貼付を持つ。296～299は、沈線で区画し沈線間に縄文を施した、縄文時代中期の深鉢の口縁～胴部片である。296は渦巻き状の沈線文を施し口唇が凹む。300～314は縄文時代後期前葉の深鉢である。300～304は縦位や横位の隆帯文を施し、沈線や刺突による文様を描くものである。303は波状口縁を呈し膨らみを持つ器形であり、304は縦位の竹管文を施す。305～308は突起を持つ深鉢の口縁部で、305・307は環状突起、306は円盤状突起を施し、308は注口状の突起である。309～311は縄文と沈線を施したもので、309は波状口縁の外面に小突起を持ち、胴部外面は流線を基調とした沈線文を施す。312～314は、体部に単軸絡条体による縄文を施したものであり、314は細めの沈線を斜交するように施す。315・316は縄文時代後期中葉の土器である。316は幅広の口縁部がラッパ状に開く器形を持つもので口縁端部と外面の一部に付着物が認められる。317・318は縄文のみを施した縄文時代後期の土器であり、318は直線的に開き口縁部付近で内径する腹である。319は底面外面に網代痕が残る底部である。320・321は壺である。320は小さめの底面から膨らみを持つ胴部に立ち上がり、頸部で大きく窄まり口縁部が外反する壺であり、口縁は二重口縁を呈する。321は区画した沈線内に縄文を施した壺の頸部付近である。322は外面に丁寧なミガキ調整を施した後、沈線による文様が巡る小型壺であり、底面外面に網代痕が明瞭に残る。

包含層出土492点の石器の内訳は、小破片も含めて石鏃20点、楔形石器3点、削器5点、石錐2点、石箟1点、二次加工剥片3点、微細剥離剥片5点、石核9点、剥片98点、打製石斧11点、磨製石斧7点、石刀1点、礫器52点、棒状石製品46点、磨石・敲石168点、凹石28点、石皿・台石17点、砥石14点、石製円盤2点である。この中から57点について図化した。

323～336は石鏃である。323～331は基部に抉りを入れ、逆刺を作出した凹基式で、323～326は抉りが深く、327～331は抉りが浅いものである。332・333は基部を直線的に調整し、平面が二等辺三角形を呈する平基式である。334・335は基部が円弧を描き、丸みのある円基式である。336・337は基部が突出した凸基である。338～340は楔形石器であり、細かい剥離を施し刃部を作り出している。341～343は削器であり、343は直線的な刃部に仕上げている。344・345は石錐であり、344はつまみ部が欠損し345は錐部先端がつぶれている。346は剥片を籠状に薄く仕上げた石箟である。347・348は二次加工剥片であり、347は粗製石匙状を呈し348は石鏃未製品の可能性がある。349～353は微細剥離剥片であり、350は左側面裏に二次加工が見られる。354～357は剥片の母岩となった石核であり、表面に粗い剥離痕が残る。

358～360は打製石斧である。358は下面および両側面を粗い剥離で成形し刃部を作り出して



第51図 繩文時代 出土土器①